

## 神原文庫にある明治期の「ドイツ文学」からの翻訳本3冊 —ゲーテとハウフの翻訳—

経済学部教授

瀧 川 一 幸

今回紹介するのは、ドイツ文学からの翻訳本3冊である。具体的には、以下の本である。

- ① 禽獣世界「狐の裁判」 独逸ゲーテ著 日本井上勤述訳、明治19年刊 東京、春陽堂書房
- ② 泰西奇譚「旅路の空」 独逸巴烏弗著 日本柏城逸士 夢幻生述訳 明治21年刊（東京イーグル書房）
- ③ ゑるてる 久保天随訳、明治37年刊（東京金港堂）

さて、これらの本は、その中の2冊がゲーテの本であり、独逸の詩聖とも言われるゲーテの本であるから、極めて広く名を知られ、また後で詳述するが、①と③は、それぞれドイツでも有名であった本なので、かくも早い時期に翻訳されても不思議はない。また著者の名前「ヴィルヘルム・ハウフ」を漢字で「巴烏弗」と当て字している程、明治の中でも古い時期を示す②も、ドイツでもグリムやアンデルセンと並んでよく読まれている童話集の作者であるので、知名度でもそれほど遜色のない本である。つまり、この3冊の本は、ドイツでも日本でも過去においても現在でも良く知られた本である。そういう点で、このように早い時期に翻訳され、日本に紹介されたのも当然であると思われる。

しかし、今回、この3冊の本を紹介するために、翻訳の歴史を少し調べてみた。その結果、非常に驚かされた。私の手元に「立体ドイツ文学」と言う本がある。初版が昭和44年と言う少し古い本であるが、この本には、重要作品の翻訳本や研究書が時代順に並べられていて、過去にどのように翻訳されてきたかが分かるので便利である。①のゲーテの本は、「ライネケ狐 (Reineke Fuchs)」として翻訳が年代順に11冊並べられている。そして一番古い翻訳としては、「ライネケ狐 松村正俊（全3）聚英閣 大正14年」とある。だからこの

文献集は、神原文庫にあるもっと古い翻訳本があったことを見逃している。つまり、この本より40年ほど昔に神原文庫の翻訳があったわけである。ただし、「日本におけるドイツ語文化回顧展」のカタログ（1990）によると、同じ訳者の井上勤氏訳の「独逸奇書『狐の裁判』」（絵入自由出版社（東京）明治17年）がある。そして恐らくこの本を再編した本がこの神原文庫の本であろう。さてこのカタログの説明によると、これは英語からの重訳のようである。筆者は日本での翻訳が何時ごろから翻訳されて、どの本が何時ごろの本なのかと言った翻訳史に暗いが、この本は恐らくもっとも早い時期の翻訳であったと言えそうである。

続いて「泰西奇譚『旅路の空』」は、実際に本を開いて調べてみないと何の翻訳かわからない本であるが、これは、ヴィルヘルム・ハウフの「隊商」の一部を翻訳した童話集である。そしてハウフの本を上記の「立体ドイツ文学」で調べてみると一番早く翻訳された本として、「ハウフ童話集」として、世界童話体系23の中に刊行会が大正15年に出版した本を挙げている。だからこれも40年ほど昔に、一部とはいえ、翻訳が在ったわけである。そして当然、この本ももっとも早い時期の本の1冊に挙げられよう。

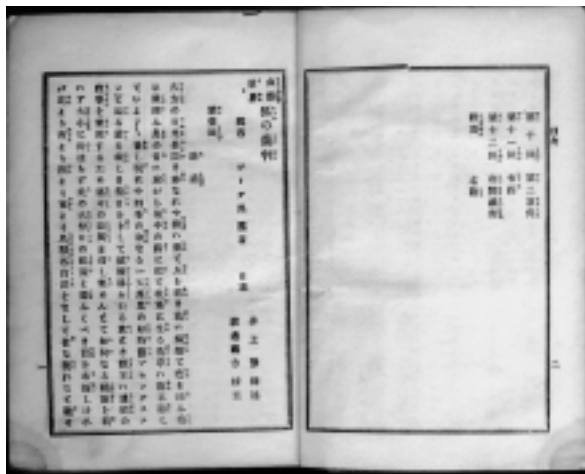
最後にゲーテの「ゑるてる」は、今でもドイツ文学の中で「若きヴェルテルの悩み (Die Leiden des jungen Werthers)」として、一番良く知られ、読まれている本の一冊である。また、この本は一説に今までに50冊以上の翻訳があると言われている。この本も同様に「立体ドイツ文学」の翻訳史の中で調べてみると、明治37年出版の本として、第1位にランクされている。また前述の「日本におけるドイツ語文化回顧展」のカタログによれば、「久保天随は、漢学者。翻訳の経験豊かな橋本青雨の協力を得て、ゲーテの名作『ヴェルター』を

日本で初めて完訳した。たちまち版を重ね、その後日本の若者たちのあいだに持続的なヴェルテル熱が漂っていた。」とある。従って、極めて貴重な本であるといえる。

以上から言って、この3冊の本は、貴重本ということで、それぞれの原本の最も古い翻訳本と考えてよいであろう。こうした本が神原文庫にあることは、まことにすばらしいと思うし、貴重である。他大学でもそんなに多く所蔵していないのではなかろうか。長い年月を経ているので、紙はかなり痛む可能性がある。大切に扱い、いついつまでも保管していった欲しいものである。

それでは、次に上記の3冊の本をもう少し詳しく説明してみたい。

#### (1) 禽獣世界「狐の裁判」 独逸ゲーテ著日本井上勤述訳、明治19年刊東京、春陽堂書房



『狐の裁判』の冒頭部分

この本は、ドイツの詩聖と呼ばれる ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749 - 1832) の作品である。しかし、題材は、ヨーロッパに広く流布してきた伝承「ライネケ狐」から取って来ている。ゲーテは、ドイツの大詩人として知られているが、若くしてワイマール大公に招聘されて、政治にも携わってきた。一時は当時の制度で最高のポスト（現代なら総理大臣）に就いて政治を行ったこともある。しかし、政治と文学は、彼の内部で調和せず、彼の文学性を次第に蚕食させたので、自らの詩人性を救い出すためにイタリア旅行を行ったことはよく知られている。この事情は、戯曲「タッソー」の中で、

詩人と政治家である男との葛藤の中に窺うことができよう。また当時は、フランス革命からナポレオン戦争へと続く動乱の時代であった。こうした中で、ゲーテは、時代の荒波を自分の才知と術策で切り抜けて生きる政治家にも時代を超える普遍性を感じた。「ライネケ狐」は、ライオンを王とし平和に生きようとする動物世界の中で、何かと騒ぎを起こし、皆を騙して生きる狡猾でならず者の「ライネケ狐」が主人公の話である。おそらくゲーテはこの狐の形姿に、上述の意味で一種の共感を覚え、民話を韻文にし、作品としたのであろう。

この「狐の裁判」は、ゲーテの作品をかなり自由に分かりやすくして翻訳したものである。この冒頭を現在訳に比べてみるとなかなか面白い。時代の差異をいやが上にも見てしまうからである。

#### ● 「狐の裁判」の冒頭（明治19年）

ひさかた ひかりのどけ はる やなぎ たれ ひと まね  
久方の日光長閑き春なれや柳は垂て人を招き  
はな みだれ いろ そ そら と び か とり ね さな  
花は爛漫て色を添ふ空に飛翔ふ鳥の音は宛が  
ら きちゅう すず に ま き ば おふ せいぞう あめ よく  
ら 気中の鈴に似て牧場に生る青草は雨に浴し  
ていよいよ蒼し現にや四季の初なる一天  
ばん り こう じ せつ いへ いと  
万里の好時節「プヒングステン」と云る最も  
たの さいじつ ぼく  
楽しき祭日を卜して……

#### ● 潮出版ゲーテ全集2巻 藤井啓行訳（1980年出版）

胸もときめくお祭りだ、聖霊降臨祭のときが来た。

野にも森にも草萌え花は咲き乱れ、丘に山に、茂みに垣に、

目ざめたばかりの鳥たちが、たのしげな歌をきそい合う。

靄たちこめる谷あいの、どの草原にも花こぼれ、天空は晴れがましげに澄みわたり、大地は色あざやかに照り映えた。

上文を見ると美文調である。また句読点がない。訳者が漢学者であるので当然かもしれないが、明治時代の漢籍に強い五七調の韻文が見られる。おそらく現代の学生は、すべての漢字にルビがふつてあるので、読めるであろうが、あまり読む気が起こらないであろう。言葉は時代とともに生きるから、あまりにも文体の差が大きくなってしまったからである。しかし、想像するに、明治期には斬新な訳であつたろうし、また西欧の文化に憧れて、興味をもって読まれたであろう。またルビは、漢字教育にも役立ったかもしれない。

(2) 泰西奇譚「旅路の空」 独逸巴烏弗著



『旅路の空』の表紙と表題紙

これは、題名を見てもどのような話かは、よくわからない。またヨーロッパ人の名前にもまだ漢字の当て字を付けている時代である。しかし調べてみると、巴烏弗は、ヴィルヘルム・ハウフ (1802.11.29 - 1827.11.18) のことである。シュトットガルト生まれのシュヴァーベン人のハウフは、後期ロマン派に属し、ティークや E.T.A. ホフマンなどから強い影響を受け、幻想性と怪奇性がこの詩人の特性であると言われる。また小説3篇、他に短編も幾つか書き、そして童話集を出した。しかし25歳の若さでこの世を去った夭折の詩人でもある。彼は、文学作品でそれほど大きな評価を受けていないが、その童話は、時代を生き延びている。グリム、アンデルセンと並び、長く彼の童話集は読み継がれてきている。特に「隊商 (Die Karawane)」が。日本でも事情は同じで、彼の童



『旅路の空』の挿絵

話集は、今でもお目にかかれる。岩波文庫には、「隊商」と「盗賊の森の一夜」の2冊が入っている。また国書刊行会の「ロマン派全集全7巻」の中に、「ハウフ・メーリケ」と題して、彼の長編小説など (例えば、「冷たい心臓」など) が入っている。

神原文庫の上記「泰西奇譚『旅路の空』」は、「隊商」の中の童話を4篇翻訳したものである。そして幾つかの挿絵が挿入されている。おそらく原作にあった銅版画を適当に挿入したのであろう。

(3) ゑるてる 久保天随訳、明治37年刊 (東京金港堂)



『エルテル』の表紙

これは、ゲーテの「若きヴェルテルの悩み (Die Leiden des jungen Werthers)」の翻訳である。前者2冊が、明治の20年頃の出版であったが、それと比較すると本自体の装丁や痛みも少なく、やはり時の流れを感じさせる。十数年遅く出版されたためであろう。しかし、本格的なゲーテの翻訳としては、前述したように、日本で最初に完訳されたものである。また「若きヴェルテルの悩み」自体がゲーテの作品の中でも最もよく知られた作品の一つであるだけに、一層価値がある。なかなか、他大学でもこのような稀少本を持っているところは少ないのではあるまいか。

「若きヴェルテルの悩み」は、ある画家志望の若者が、あるパーティーで婚約者のいる女性と知り合い、恋するようになる。そして婚約者がいる女性との恋は、当然、出口のない恋であるので、深い絶望から終にピストル自殺をするまでを描く。

この小説は、当時としては比類のないほどのベストセラーとなり、主人公ヴェルテルの青い燕尾服と黄色いチョッキを着て、主人公のように自殺する者まで出たので、喧喧諤諤の論争を起し、一躍ゲーテを世界的な詩人にまで押し上げたと言われている。後年ゲーテは、ナポレオンと会談するが、その話題はこの小説だったと言われている。そして現在でも、例えば世界の必読書100冊を選べと言われれば、恐らく必ず入る作品である。若々しい、何時の時代でも恋する人の胸から迸る感情は、強く新鮮で、何よりも美しいであろう。その思いが、手紙の形で表現されるので、若い人の心を直接に打つ作品になっており、いついつまでも読み継がれる永遠の命を持っている。

神原文庫の「ゑるてゐる」は、明治37年の翻訳である。先に一部現在訳と比較したが、ここでも現代訳と比較してみよう。

●神原文庫の「ゑるてゐる」の一節 (201ページ)

エルテルは、齒を咬縄<sup>くひし</sup>ばりて、いと裏悲しげにロツテを熟々<sup>つくつく</sup>と打目成りぬ。ロツテは、其の手を確<sup>しか</sup>と握りて、「しばしが程、心を鎮め給え、エルテルの君、君は我と己を欺きつつ、故らに身を破らむとするを知り給わずや。如何なれば、妾を、エルテルの君よ、この妾を、人のものなる、この妾をば！ — 氣遣わしきは、氣遣わしきは、妾を獲給うことの、遂に叶わぬことなれば、君が思いの愈よ激しうならむことにこそ」

●人文書院社版ゲーテ全集第7巻前田敬作訳 (98ページ)

ウェルテルは、齒ぎしりをしながら、暗い面持<sup>おももち</sup>でかの女を見つめた。ロツテは相変わらずかれの手を握っていた。「ほんのしばらくだけ、気持を鎮めて、わたしの申しあげてを聞いてくださいな、ウェルテル。あなたはご自身をあざむいて、わざと破滅しようとしていらっしゃるのです。それがご自分でおわかりにならないのでしょうか。ウェルテル、なぜまたわたくしのようなものを、他人の所有物であるわたしのような女を、おえらびになったのでしょうか？なぜそんなことになってしまったのでしょうか？思いすごしかもしれませんが、私をご自分のものになさることは到底できない相談だとわかっていらしゃるからこそ、かえってこの望みをすばらしいものだとおmoiこんでいらっしゃるのではないのでしょうか？」

引用部分は、恋のクライマックスの部分で、ロツ

テがウェルテルの強い求愛を拒絶する場面であるが、こうした感情の高揚した表現は、明治の文を読むと非常に苦勞したことが見える。例えば、ウェルテルと呼ぶときに、「エルテルの君」などと訳されている。また、「わたし」と言うところを「妾」と呼ぶ。こうした表現しか選べなかった明治から、現代訳を見ると如何に日本語が豊かになり、直接的な表現も可能になっていることが知られよう。なお、この本には、最初に当時としてはきわめて貴重であったと推測できるゲーテの簡略な伝記と『『ウェルテル』著作の所因とその影響』と題する解説文がついている。きっと明治期の人々にゲーテの正確な伝記と作品のドイツにおける意義を知らしめる働きをしたと推測できる。

他に銅版画の非常に美しいウェルテルとロツテの挿絵が表紙裏に挿入され、ヨーロッパの恋人の正確なイメージも伝えられたであろう。

